

”病診連携”と 3 次元神経画像のはなし

医)涼風会 佐藤脳神経外科 佐藤 透

尾道市立市民病院に脳神経外科が開設され 21 周年を迎えられること、誠に欣快に堪えません。小生、松永の地に平成 3 年に開業して、はや 13 年となりますが、開業当初より今なお、”病診連携”、いろいろな面でご援助ご配慮いただきありがとうございます。当時、土本正治先生から、元手術部の優秀な看護婦をご紹介いただき、その後も婦長としてずっと当院で務めてくれて大助かりです。手に負えない重症例、夜間休日の急患、他科にまたがる複雑な症例、飛び入りでの転院などなど、最も近くにある病院施設として、なんでもかんでもすべて、おんぶにだっこで、いやはや頼もしい限りです。当院が今日あるのも、これひとえに市民病院のお陰で、この無限の傘のなか、一丁前に好き勝手な診療ができることを日々感謝する次第です。

しかし、この間、診療所・病院を取り巻く医療環境は、大きく様変わりしました。当初こそ、脳動脈瘤や脳腫瘍の手術も粹に思ってやっていたましたが、今では、とても診療所で外科手術を布施する状況ではありません。楽しみに見つけた未破裂脳動脈瘤を、自院での手術治療で完結する醍醐味なんて、とっくの昔に忘れてしまいました。現在は、脳神経外科の知識と経験にもとづくこれまで通りの一般診療に、デイケア・デイサービス、訪問看護、グループホームなど痴呆がらみの介護診療が勢い加わってきました。痴呆は人間がゆえの行く末のひとつと考えれば、人間学として味わいのある奥行き深い領域だと実感します。それはそれでいいのですが、最近の医療では、診療所と病院とでは取り扱う疾患、患者層が違うのではないかなと、つねってみても錯覚ではない現実があります。そこは、”病診連携”をすることで、高度医療・外科手術の病院と面倒み・かかりつけ医の診療所が棲み分けし、お互いが協力して結果が見通せる治療をするのが現代の医療というわけです。脳卒中ひとつとっても、brain attack の掛け声のなか、救急車は診療所を素通りして病院に行き着き、巷の患者は脳卒中センターに集約されるご時世です。つまり、病名のつく疾患は病院で治して、気の病は診療所で面倒見てもいいってことでしょうか。心臓が止まるまで、寸暇も惜しまずありとあらゆる救命努力をした研修医時代、そこで培ってきた医者之魂や何処に、いまや風前のともし火です。いつの間にか延命治療まかりならず、見込みのない患者は早々と切り捨て、脳死さえも幅を利かす医療環境へと変遷しています。全国津々浦々、他人行儀なインフォームドコンセントのあとで、信念を捨てて、証拠に基づいた均質な EBM 治療へと取って代わられそうです。フランチャイズのファーストフードのお店じゃないんじやけえ、責任の取り方さえもマニュアル見ないと分からないなんて、説明と責任逃れってとこかな。どんな患者であろうとも、患者さまの希望を第一に、そしてそれを叶え、ときには家族のご都合に合わせて、ホテルに負けない至れり尽せりのサービスを座右に眺め、現実的にそれなりの医療を提供する、診療所業務すべてを単なるサービス業と割り切ることで、いいお医者さんになるわけです。

こういう開業医の医療観は、病院勤務の専門医トップ集団には分かりづらいところでしょう。でも、このままでは、pop-eye、藪睨みの町医者としては、ちとおもしろくありませ

ん。そこはオーナー開業医、理事長権限を最大限に発揮して、ゴルフに出掛けると同等以上の楽しみを日常診療のなかに見つけるために、あれやこれやと知恵を絞りました。挙句、CT、MRIとワークステーションに投資し、コンピューターCGネットワークを診察卓上に据えました。結果、CT、MRIの生体情報から三次元神経画像を、試行錯誤、画家の境地で創作・描写する楽しみを見つけました。百聞は一見にしかず、**Seeing is believing**の諺の如く、生体情報の三次元可視化は、肉眼や想像力の限界を打破しようとする人間の潜在的な好奇心をくすぐります。現在のところ、日々の診療のなか、3次元神経画像を創ることが、雑念を忘れて生き生きと青春する糧となりました。

ここ最近5年間で、正直、3次元神経画像に嵌ってしまいました。そのなかで、土本正治副院長先生、小野田恵介先生、勝間田篤先生ら市民病院スタッフの皆々様とCT、MRI・3次元可視化技術の臨床応用について共同研究することができ、数々の新しい知見を得ることができました。新しい発見の成果は、日本脳神経外科学会総会、日本CI学会総会をはじめとするいろいろな学会で学術発表しました。さらに、脳神経外科、脳神経外科ジャーナルなどの和文雑誌をはじめ、**American Journal of Neuroradiology**などの英文雑誌にも誌上発表できました。小回りのきく診療所での画像診断技術と高度医療病院での臨床治療が結びついた、こういう”病診連携”って、全国どこを探しても見つからない”素適な関係”だと自負しています。

今後も、地域中核病院、尾道市立市民病院の脳神経外科が、ハードソフトともさらに充実されることを願って止みません。医療環境の激動の中、余裕が出来れば、患者の受け入れだけでなく、診療援助もお願い致したいと思います。これからも変わりなく、医療においても学術においても一層の”病診連携”、お付き合い下さるようお願い申し上げます。